白隱禪師略傳

法嗣 珊瑚老人編輯

浪越 其中書屋

正宗國師ノ小傳

師ハ駿州駿東郡原驛ノ驛長杉山氏ノ男ニシテ貞享二年十二月廿五日音響ヲ得テ生ス幼名岩治郎ト言フ天性頗ル勇氣溢レテ事ニ臆セス一日邑ノ昌源寺ニ入リ日嚴上人ノ摩訶止觀ノ講席ニ列シ地獄苦惱ノ說ヲ聞テ心大ニ怨怖シ是ヨリ出離ヲ求ムルノ心ヲ發ス元錄十二年二月廿五日

正宗國師ノ小傳

師ハ駿州駿東郡原驛ノ驛長杉山氏ノ男ニシテ貞享二年十二月廿五日奇瑞ヲ得テ生ス幼名岩治郎ト言フ天性穎敏勇氣溢レテ事ニ臆セス一日邑ノ昌源寺ニ入リ日嚴上人ノ摩訶止觀ノ講席ニ列シ地獄苦患ノ說ヲ聞テ心大ニ怨怖シ是ヨリ出離ヲ求ムルノ心ヲ發ス元錄十二年二月廿五日

歳十五遂ニ邑ノ松蔭寺ニ入リ單嶺傳公ニ就テ得度ス名ヲ惠鶴ト改ム以後為道東西ニ奔走シテ耆德ノ門ヲ窺フ歳廿四性徹和尚ノ講會ニ在リ一旦遠寺ノ鐘聲ヲ聞テ豁然トシテ大悟ス同年四月信州ノ匡愛老人ニ見エ平生ノ見解ヲ一掃シ身心ヲ抖擻ス宝永五年十一月駿ニ還リ松蔭ニ住シ聖胎長養ス享保三年十一月

位ヲ妙心第一座ニ轉シ称シテ白隱ト号ス法幢大ニ振フ竟ニ已墜ノ宗風ヲ挽回ス篤下十案員ノ善知識ヲ得タリ實ニ吾宗中興ノ祖ト言フ可シ明和五年十二月十一日遷化ス壽八十四　後櫻町天皇勅シテ神機獨妙禪師ノ徽号ヲ賜フ今上天皇モ亦師ノ高德ヲ賞讃セラレ本年五月正宗國師ノ諡號ヲ勅宣アラ

セシタリ蓋シ号ヲ正宗ト賜フハ佛心ノ
正宗ヲ中興スルノ謂歟茲ニ假名薩ノ出
版ニ際シ鄙カ師ノ小傳ヲ記シテ以テ後
進發僧ノ為ニ示スト云ヒ
明治十七年六月下浣
臨濟沙門修道謹誌

藏福編圖

虎ゝ出ル

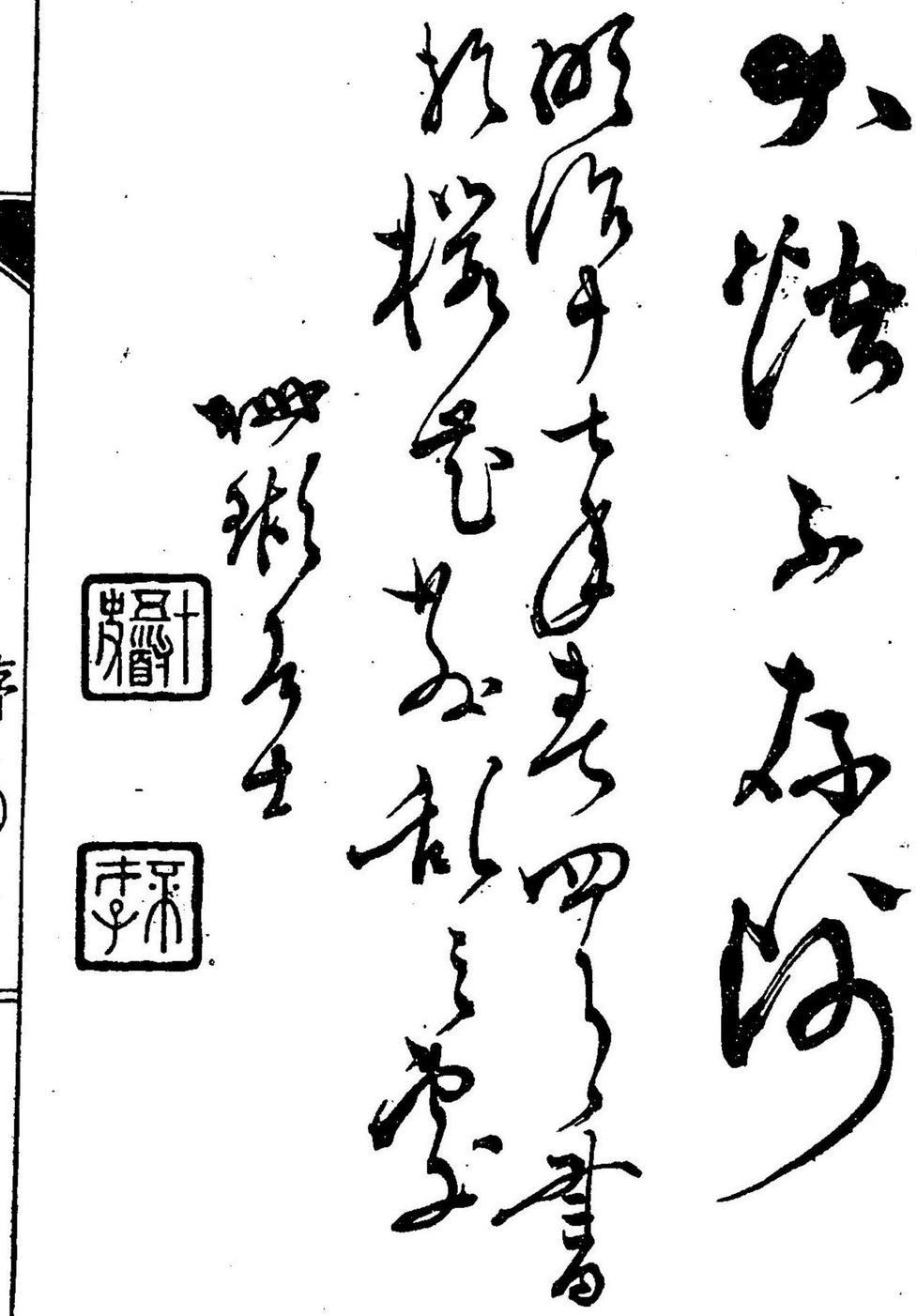
老婆心

白隱

戲言細語皆第一義
何況法說譬喻耶先
師過古稀後舌鈍識
懵恐法爲不及初機

依是丙寅歟孜々編
書名曰辻談淺不禮六
道街衢是菩薩道場
不起禪定飯入同事

提者即衲僧轉身自
在之活三昧歟　茲合
粉引歌附梓者普
施初心道友永為當
来〻資糧矣　囑〻
明和庚寅夏豆〻東嶺
於洛東翫月亭書



序

時ハ嚴暑ニ有リ流汗杵ヲ漂シ居士茲ニ倦テ眠ニ就カレトス机上偶マ余カ秘藏スル處ノ書目錄有ルヲ見熟視讀過シテ將ニ終ラントスル處ニ至リテ白隱禪師カ編著ノ書籍數部アリ開テ之ヲ見レハ皆々國家ノ金瓶トナリ有益トナルノ良書タリ余欣々喜々ニ堪エス之ヲ編成シテ小部冊トシ名ケテ假名葺ト稱シタリ笑テ竊ニ其中堂老人ニ示ス老人三唉手ヲ拍テ曰妙々世間ニ流布シテ禪學初心ノ便タラシムルニ如カスト持去リテ刻成ルニ及テ來テ序ヲ請フ余其始末ヲ述テ序トス　編者識

白隱禪師假名葺乾ノ卷

夜船閑話序　窮乏菴主饑凍選

寔曆丑の春長安の書肆松月堂何某〳〵や閔へ遠〳〵草書を裁して吾が鵠林迂侍の左右に寄せて云〳〵伏〳〵て羊羹る老師の古紙堆中夜船閑話〳〵や云へる草稿あり書中多々氣を錬て粧を養ひ人の營

衛をして充てしめ専らに長生久視の
秘訣を聚む謂ゆる神仙錬丹の至
要なるものと是故に世は好事の君子
是はおのふ支荒旱の雲霓のやう
偶々ここのの徒侶竊に傳写して来
るあり秘蔵して人に
て見せ吉めば天鄙むべく櫃
にかはして匿して秘蔵は

是は棹に壽ぐふ志をいて其渇を慰せ
ん聞く老師常に人を利さるをいて
老境を楽しまふと若吏人に利あはば
師豈に是を吝まんや玉ワんやと二虎
合して師に呈して師微ほしして
笑ふ此において諸子書櫃を開き
ば草稿蠹魚の腹中に蔀ふる者
中葉にして諸子即ち訂正傳写

して既に五十束紙を見る即ち封裹して京師に寄せんとす予が馬齒一日も諸子に長ずるを以て其端由を書せん叟を責む予も亦辭せずして出て云く師鵠林に住する事大凡四十年鉢囊を掛け一里に束雲水參玄の希納子繩に門闃に跡を絶て師の毒涎を甘ひ痛棒を滋くして辭し去る事を忘る者式八十年式八十年

鵠林の下の塵と成る叟も亦從に顧て
ぜる底あり畫夜見て是叢林の頭角四
方の精英ふ里各〻西東五六里が間
に分て舊舍廢宅老院破廟僧
てゝて菴居の處とゝして清者と朝
艱暮辛畫簸夜凍口ふ投る者は
菜葉麥麩耳に觸る者は勢喝

垢罵骨に徹とる者は嗔拳痛棒見る者額
積んで聞者肌汗とて鬼神も涵た涙城深く注
ぎ〜魔外涵〜掌代合せぐ〜手初め来る
時は宋玉河晏ぐ義貞有て肌膚光澤凝し
る膏はゆ〜ふる者も久〜うるぼして恰も
杜甫賈嶋の形容枯稿顔色憔悴せるが如く
或ハ屈子に澤畔に逢ふゆ〜参玄軀命
代顧ぎる底の勇猛の上士にあらざる

罵んバ何の樂〜有てる時も淫泊なる
支代得んや是故に往々に参窮度にるでと
清苦節と失なる旅代肺金いく〜ゆ〜
水分枯渇して痳癖塊痛雑治の事症代発
せんゆ代是代熱して師ふ豫の色
有る者連日代ち恐俊不様にして雲頭を
按下〜老婆の臭乳を皮つて是に授るに
肉観の秘訣代ふて代乃ひ云〜若〜

是参禅辨道の工士心火逆上し身心勞
疲し五内調和せざる事あらんに鍼灸
藥のこゝを以て是迄治せんと欲せば
返て益なし陀扁倉こゝに輙く救い得
る支能ひ我に仙人還丹の秘法あり
你が輩ゝ試に是迄修せよ奇
切を見る事疑を拂ひて皎日迄見るる
ものゝ若し此秘密を修せんと欲せば且

〻工夫を拋下し話頭を拈放して先須
〻熟睡一覺を覺まし未だ睡眠たらざる
眼を合せざる前に向て長〻南柳を
展べ強く蹈〻そろく身の元手を以て
臍輪氣海丹田腰脚足心乃至に充た
しめ時に此觀成就せば我此の
氣海丹田腰脚足心後に是彩本来の
面目〻何の鼻孔か有て此の氣海

丹田後に是、彼が本分の家郷、何の消息あ彼家が此の氣海丹田後に是、彼々唯心の浄土、何の莊嚴ある我が此の氣海丹田後に是、彼が己身の弥陀、何の法ぞ説く、寸寸毎日へ、常に切々のあく妄想、さべ、妄想の思つ、は一身乃元氣いたく腰脚足心の間に充足して脇下氣穴に充つまこ條

寸ち勢ひる鞠のあもん徒歩に単に妄想、打ち去て五ヶ七ヶ乃至二三七日を重ねる むふ從前此大積六邪等思勞役等乃諸症底に拂て平癒ぜんハ、僧が頭を切て拂ち去ま此にあ諸子歡喜化して密に精修して各、悉、ふ儀乃奇功を見る功の遲速は進修の精粗に依るといへども大守旨全枝と名、内親の奇功を

讀漢方して休まば師の曰く你が軍心病全快を得て以て足まることなる支ふるを轉く治せは轉く參ぜよ轉く培へば轉く進えを僧初め參学の時雖治の重病を蒙して其憂苦諸子に十倍せる進退惟谷ふ所なるを心ふ云そに思惟ちくしき て此憂愁に沈まんるはなくば早く死て此革嚢を捨んまはと何の幸ぞやしの内

の秘訣を授くして全快を得る支今乃諸子の如く至人の云く此は是神仙長生不死の神術なり中下は世壽三百歳ふるを上上餘は計を定むべくば予則ち歡喜に堪へず精修為ばかる大凡三年心身次第に健康に氣力は更に勇壯ふ彭支を覺ふ此において重ねて心に竊に謂へらく縱ひ此法を修得て彭祖の八百の歳時を

保ち得るも唯是一箇空無智を守屍鬼ふ
ゝるの〻老狸の舊窠に睡るがゆゑに終に
壞滅に歸せん何が故ぞ今既に獨り葛洪
鐵拐張善費張が軍を見ざゆゑに四弘の大
誓願起し菩薩の威儀を學び常に大
法施行し虛空に先つて死せば名を
後世に生ぜる底の不退堅固の真法
身成寸殺し金剛ふ懷の大仙身を成

就せんまはと坐禪おいて真正參玄の上士あり
事成得て内觀と參禪と共に合せ並べ貯へ
て身を耕し且つ戰ひ出蓋し茲に三十年
年〻一員成添へ二扇を增し得て今既
に二百象に近し其中間方來の栖子
労屈疲倦の嬉〻或は心火逆上し正ふ
發狂せんとする底を憐れみ密かに内觀
の至要を傳授し立所に快癒せしめ

轉〻悟るは勢〻進展し馬年今茶古
稀に越へたるまゝ云へば寸毫の病患な
く歯牙全く揺落すれば眼耳は身に今
明にして動もすれは靉靆を忘る毎月
数度の法施終に怠倦せば請に他
方に應じて三百五百の海衆を聚會
して或は五句七句を徑に綠に句一
句を西望に随〻胡說乱道する者大凡五六十

會に及〻云へるも終に一日も罷講斎鎖
さず身心健康氣力は少年に二三十歳の時よ
遥に勝さる是皆彼の内觀の奇功に依
る事を覺ふ住菴の諸子各〻悲泣作禮して
云〻吾が師大慈大悲願〻は内觀の大畧成
書せよと書して留め〻後来禅病疲倦吾
が輩の如き者を救へ師即ち領して立ちに草
稿成る移中何の說〻ぞと曰〻大凡生成養

以長寿と保生の要形体錬るに去らば形を錬
るの要神氣成して丹田氣海のうに凝ら
ちしむるにあるを神凝る則は氣聚るゝる
則は即ち真丹成る丹成る則は形固し形
固き則は神全し神全き則は壽し是仙
人九轉還丹の秘訣に勢へ至須く知るべ
し丹は涙して外物に非ず類支を千葛唯
心火を降下し氣海丹田のうに充たしむ

るに有るゝの住菴に諸子必心要成勤
めてたゆまず進んで怠ることなかれ禅病を治し
勞疲を救ふるにあらず禅門向上の事に到
て年来疑團あるひとは大ひなるを拍て
大笑とする底の大歡喜有るべし何ぞ故ぞ見る
して誠に畫く

時寛暦丁丑孟正廿五賞

窮乏菴主飢凍炷香誓音題

夜船閑話

山野初め冬學の日誓つて勇猛乃信心試憤發一不退の道情試激起一精錬刻苦して多者既二去三霜を一夜忽然として落節して從前多少の疑惑根に和して氷融一曠却生死の業根底に徹して渥減して自謂ら〳〵道ち人を去る支寔に遠〳〵古人二三十年是何の揑造ぞ〳〵怡悅踊舞

を忘る者數月間日用を廻顧するに動靜の二境全く調和せば去就のあ道忽に脫洒なるべく自〳〵謂〳〵〳〵猛〳〵精彩を着る重ねて一面捨令一去んぬ遮ひて牙關を咬定し雙眼睛を瞪開一寢食に廢せんとす既にして未ざ期月に耳に入る所に心火逆上一肺金焦枯して雙脚氷雪底に浸さるが如く耳溪澤の如く行〳〵肝膽常に怯弱にして舉措恐怖

多く心神困倦し寐寤種々の境界を見る夢腹常に汗と生じ衣服常に涙と帯ぶ此におのゝ遍く明師に投じ廣く名醫と探ると云ども百藥効なし或人曰く城の白河の山裏に巖居せる者あり世人是を名づけて白髭と云ふ靈壽三四甲る氏閲し人居三四里程を隔て人を見る事氏好酒で行く則ち必ず走て避く人を賢愚と辨ずる事なし里人專ら称して仙人と仰ぎ故の丈山氏

の師範として精く天文に通じ深く醫道に達して人の禮を盡して咨問る則は稀に微言吐く退て是を考るに大ひに人に利あると此氏において富永第七庚寅孟正中院竊に行塵氏着け濃東を蔭し黒谷氏越へ直ちに白川の邑に到り包と茶店に於て逢る巖栖の客を得て黒人遥に一枝の溪の氏指を即ち波の水を掬に酒く深に逢に山深に分る正に行度

里ごとに作ち流くの岐蹈斷して樵徑もまた希
時に一き更めて遥かに雲煙の中に指して黄白に
て方寸餘ふ彩有あるを山氣に隨て或は顯りも或は
隱る是遥の洞口に垂下るの蘆簾たるを帝
即ち震と襲めて上る嶮巖岐蹈て紫蓐を被
りて氷雪草鞋を咬て雲露衲衣を靡して亭行
を滴て苦膏を流して漸く彼の蘆簾に到
ば風致清絶無に物表に下て切る事を

覺て心魂震ひ肌膚戰栗して見ず巖根に
倚て歎息する者數百歩つて衣を振ひ襟を正
して畏ぎ鞠躬して簾の中に望んは
朦朧として遥に目を收めて端座するを見る蒼
鬚塵膝に到り朱顔滿て大
布の袍に掛めて輭草の席に坐して寂中に
方五六尺にして金資生の具子机
上に中庸老子金剛般若に置て則

ち禮拜畫して苦ろに病苦を告げ且つ救ひを請ふ
文焉遽眼を開いて熟〻視て徐〻として告げて
曰く汝は是山中半死の陳人橡栗を拾ひて食ひ
麋鹿に伴なひて睡る此外更に何をか知らんや自ら
愧ぢ遠く上人の来望を枉げ勞するを以て即ち轉
〻咨叩して休すべき時に逢ふ遥恬如として戸が多く
捉へ〻精〻五内を窺ひ九候を察して凡
甲長〻として可憐〻乎〻として顙損なんとせば

てから已に觀理度に過ぎ進修節を失して終
に此の重症を為して實に醫治し難き者は公の
禪病なり若し鍼灸藥石三ッの物を持んで
而して後に是を救わんとは扁倉力を盡し
華陀顙を損じて奇功を見る能はず
公今既に觀理の為に破られ頻勤なんて内觀の
功を積まんは終に起る能はず是度の起
倒はならべ地に依るの謂なり戸が曰く願は

内観の要秘を聞うん学びゲてらに是れ仙ぜん遊
粛〳〵として容をあらため従客として告て曰く
鳴呼公のやさは問の支氏好むの士なり我が昔し
聞き知る所を以て微〳〵公に告んか是養生の秘
訣にして人の知る事稀まれなり忘〳〵ごとんは必
ず奇功を見る不視もはゞ期にて丈大道ゆれ
て両儀あり陰陽交和して人物生ずる先天の元
氣中間に黙運して五臓列り経脈行わり衛氣

営血互に昇降循環する者晝夜に大凡五十度肺
金は北藏にして膈上に浮び肝木は東藏ふして膈
下に沈ぶむ心火は大陽にして上部に位ひ腎
水は大陰にまして下部に占し五臓に七神あり脾腎各
々二神ありて藏して呼は心肺に出て吸は腎肝に
入る一呼に脈の行く事三寸一吸に脈乃行く支三
寸晝夜に一萬三千五百の氣息あり脈身を巡
行する事五十次火は軽浮にして上に騰昇

を好く水は沈重にして常に下流を務む若人察せざ観照或は節を失ひ志念或は度にあらざる則は心火熾衝して肺金焦薄して金毋苦らむ則は水子衰減して母子立に疲傷して五位困倦し六属凌奪して四大増損して各く百一の病氏生じ百藥功を立てる事能わざ衆醫徳に成束ね為て徒に告る處なきふ到る蓋し生氏養ふ支八國氏守るがゆへ明君聖主は常に心氏下にまる

に暗君庸主は常に心を上に恣にして上に恣ふる刈八九卿権に誇て百僚寵を恃んで貪て民の窮困を顧る事なし野に菜色多く國餓莩多し賢良憤て窮し臣民瞋り恨む諸侯離叛し衆叛競い起つて終に民庶を塗炭に陥る國脉永く断絶するに到る心を下に專らにする刈は九卿倫を守て百僚徇氏勤て常に民の勞疲を志る事なし農に餘閑

の粟あり婦に餘りあり布ありて群賢来り属
諸侯忍し服して民肥へ國強く金に遠ざかる然
民ふく境ひを侵され敵國ふく國不斗の事
をすく事をふく民ぞ戟の名を知れ人身も病く刑
を至人常に心を治して下に充たし心氣下に
充ちる則は七竅内に動く事をふく四邪病に外
ちを窺ふ支能いず營衛充ち心神健なる口
ち後に藥餌の毒酸を知らず身終に鍼灸れ

痛痒を受ぬぞ庸流は常に心身を苦して上に恣に
ち上に恣にする刑は左すれ火右すの金を尅して
五官縮まり疲も六親苦るしく眼も是故漆
園曰く真人の息は是は息とするに踵を以て
衆人の息は是を息とする喉ばかりを許俊
ぐふく蓋一氣下焦に立る刑は其息ふく氣
上焦に有る刑は其息促する上陽子ぐ曰く人
ふ真一の氣有り丹田の中に降下する則は一陽

た彼れ若人始陽初復の候に初むし欲は
暖氣にして是が信にして大凡生氣養ふ
道上部は常に清涼にして事を要し下部
は常に温煖にして事に要せよ丈経脉の十二
は支の十二に配し月の十二に應し時の十二に合
して六メ變化再周して一歳を全ふして五
陰上に居し一陽下に占し是と地雷復に云冬
至の候なり真人の息は是を息するに踵を

以てするを謂ふ三陽下に位し三陰上に居
して是と地天泰に云孟正の候なり萬物發
生の氣に含んで百春化の澤を受て至人元氣
にして下に充たしむる象人是を得る則は
營衛充実し氣力勇壯なり五陰下に居し
一陽上に止まる是に山地剥と云九月の候
なり天是に得る則は林苑色を失し百卉
荒落して是衆人の息は是を息するに喉を以

てるる象人是を得る則は永客枯槁齒
牙揺き落ち所以に延壽書にる〳〵六陽共ふ盡
〳〵則是金陰の人死ー易ら〳〵須ら〳〵知る
べー元氣ふして常に下に充〳〵し是生成養
ふ樞要なる事を昔ー吳契初石臺先生に
見ゆ齋戒ー て鍊丹の術と冩先生云
〳〵我に元玄真丹の神秘あり上ふ器にあ
ひてるるまん〳〵得て傳ふべる〳〵古〳〵黄

成子是と〳〵黄帝に傳ふ帝三七齋戒ー て
是を受〳〵丈大道の外ふ真丹ふ〳〵真丹の外
に大道ふ〳〵盡ー五無漏の法あり你ぢの六欲
を去ち五官各〳〵其職を忘る〳〵則は混然た
る本源の真氣彷彿とー て目前ふ充ち是彼
の大白道人の謂ゆる我ぐ天を以て支る所の天に
合てる者ふ〳〵孟軻氏の謂ゆる浩然の氣を
をのさひて臍輪氣海丹田に閒に藏えて藏月

を重ねて是を守て守に一去り是を養て無適に一去て一朝飛ち丹竈を撤番する刻は内外中間八紘四維総是一枚の大還丹此時に為て初て自己即ち是天地に先つて生ぜず多々羅に後として死せざる底の真箇長生久視の大神仙なる事を覚得せん是を真正丹竈功成る底の時節なれ豈に風に御し霞に跨り地を縮め水を蹈む等も鎖ま[illegible]れ幻技をい

て懐とする者なんや大洋を攪ひて酥酪一厚土を変して黄金なれ前賢曰く丹は丹田なり液ハ肺液なり肺液を[illegible]丹田に還へ

は是故に金液還丹[illegible]吊ふ曰く謹んで命

[illegible]関い活且く禅観を抛下一努め力めて

治する[illegible]期とせん忌る[illegible]ハ李士才が謂

ゆる者降に偏する者にあ[illegible]や心[illegible]憂ふ制

[illegible]は氣血或ひハ滞碍する事なし[illegible]微

びとして笑て云く拙しゝ李氏云ワぞや火の性は炎上なり宜しく是を下くしむべし水の性は下きるに就く宜しく是を上くしむべし水上り火下る是既名なりて交と云ふ交の別は既濟とは交らげる則は未濟とは交はまの象不交は死の象なり李家が謂ゆる青陰に偏なるとは丹溪と学ぶ者の弊を救いむとなり古人云く相火上り易きは身中の苦りとむ

所水を補ふは火を制る法なり蓋し火に君相の二義あり君火は上に居して静を主り相火は下に安して動を主りけだし君火是一心の主なり相火は宰輔たる蓋し相火に兼ね般あり謂ゆる腎と肝となり肝は雷に比し賢は龍に比す是故に云ふ龍出して海底に帰せしめは必ず迅雷を伴ん雷にして澤中に蔵とあんば必ず飛騰の龍を

ん海澤の水にあらざるを支なり是相火上り易きに制するの語にあらざるや又曰く心勞すれば則ち虛して心熱す心勞する則は是れ補を要に心火下まるべし賢に交は是れ補なるを既濟の道なり公先に心火逆上して此重病を發す若し心火降下せんば彼の三界の秘密を行ひ盡すたりを起す事得ず又我が形を模道家者流に彷彿するを以て大に釋に異なる者とする是禪なり他日打發せば大に笑ふべき事有らん丈觀は無觀を以て正觀とす多觀の者を邪觀に向ふに公多觀を以て此重症を見る今是を救ふに多觀を以て治すべし公若し心炎意火を收めて丹田及び足心の間に於ては胸膈自然に清涼にして一點の計較思想なく一向に識浪情波なん是眞觀清淨觀なる云ふ事なり

もまたまた禅観を抗下皆んな佛の言へる心を見心におさえて能く百一の病を治して阿含に酬ゆ用るの法あり心の勞疲を救ふ事尤妙なる至天台摩訶止観に病因を論ずる事甚だ盡せり治法を説く事亦甚だ精密なり十二種の息あり〻〻凡病を治して脚輪を観じて豆子を見る法あり其大意心を降下して丹田及び見心に収るを以て至要とす但病を治

そなるゆえに大ひふ禅観を助けて蓋繋縁諦真の二止あり諦真は実相の圓観繋縁は心氣を脚輪に丹田の内に収め守る法なり第一と仏行者是を用ゆる大ひふ利あり古へ永平の開祖師大宋に入て如浄天童に相そ師一日密室に入て益を請ふ浄曰く元子坐禅の時を如何左の掌の上にたゝぐと是即ち顕師も謂ゆる軽慢縁止の大器なり顕師

初め此の繫縁内観の秘訣伝教〻〻家兄鎮
慎ず重病を萬死の中に助け救ひ給ふ事は
精〻〻は小止観の中に説き至又白雲和尚曰
我法を得る心れ〻て腔子の中に充たむ徒を
匡〻衆伝領〻賓と接〻椽ふ應ずなび
小参番説七縱八横の方において是と用ひて
ゆる〻事なり〻老末殊に利益多き事を
覚ふ〻〻寔に〻〻〻〻是蓋〻素問にみ

ゆる恬澹虚無〻〻は真氣を元にまたがり
精神内に守〻八病行〻〻星来らむと云
ふ神に内ばきあり人者ならむ且又丈夫内に
守るの要元氣おして一身の中に充塞せし
ゆ三百六十の骨節八萬四千乃毛竅一毫髮
ぞう里も欠缺の空ふらざる〻〻事と為
そ是美成養ふ至要を少氣夏成知るべ〻〻豈
祖ず曰〻和神導氣の法當さに深〻密室と

鎖ざ一牀を案一席を燒め枕の高クさ二寸半
正身偃卧一瞑目して心氣ハ胸膈乃中に閉
ざ一鳴もハ以て鼻上にはゆて動うごゝ支三
百息を經て耳閉やふ〳〵目見るやふ〳〵形
の如くゝる則は寒暑も侵うて支能ワず
蜂蠆も毒をゝる支能ワず壽さ三百六十歳是
真人に近ゝ一〳〵又蘓内翰ゝ曰く己に飢へ
て方に食一ま〻飽ざ一て先止む散歩逍

遥一て驅んて腹れ一て空かちまめ腹の
空をゝる時に當て即ち靜室に入て端坐默
抱一て出入の息ハ數へよ一息一〳〵かぞへて十
に到り十〳〵里數へて百に至りゝる〳〵里數へ放
ち去て千に到て然身步ゝ一て然心寂步れ
ゝ身ハ虛空ゝ等し形のなくゝゝ事なゝ
一て一息おのづゝ止まる出ぶ入ぶざ時
此息ハ萬四千乃毛竅の中ゝ生雲蒸一霧

起るなり　無始劫来乃諸病自除き諸障自拭
に除滅する事を明照せん譬へば盲人の忽拭
として眼を冥くがごとん坊時人に教へて路
頭を指す事に用ひぞ只要す為常多能
と省畧して爾ぢの元氣を長養せん支を是
故ニそ、目力を養ふ者は常に瞑目耳根を
養ふ者は多に飽き心氣を養ふ者は常に黙
そそ弟が曰く酥に用る法得てつひにべし

遂が曰く行者定中四大調和せば身心ともに
勞疲する支を覺せば心に起して應さに
想に成すべし譬へば色香清淨の輭藕鴨
卵の大ひさのごとく赤新者頂上に傾立せんふ
其氣味微妙にして遍く頭顱のうたうお
ー浸ゝとして潤下て来て肩及び髀
去乳胸膈乃間脇肝腸胃脊梁膂骨次第
に活注ー將ち去る時に為て胸中の五積六

聚疝癖塊痛心に隨て降下する支水の下にたゝ〻れ〻〻〻〻して聲あり遍身に周流し雙脚を温潤し足心に至て即ち止む行者再び應さに蘇覺成ぜんとす彼の浸〻〻〻して潤下する所の餘流積り〻〻〻〻湛へ〻〻暖め蘸して支怜を共に良醫の種〻妙香の藥物を集め是を煎湯して浴盤の中に盛り湛へて永く脚輪を下し漬し蘸さしめ〻〻〻乾をふきとゝ〻唯心所現の故に鼻根乍ち希有の

香氣を聞き身根俄に妙好の觸を受〻身心調適する事二三十歳の時は遥に勝れり此時は當て積聚を消融し腸胃調和し覺〻ぞ肌膚光澤にして若き勤めて急〻ぞんば行者の病を治せざらむ行者の德を法施せむ行者の仙成せざる行者の道成ぜざる功驗の達速は行人の進修の精進に依る〻〻走始め中歳の時多病にして公の患に十倍し衆醫恐に顧〻ざる

に到る百端を窮むれども故ふなき術なし
此において上下の神祇に祈て天仙の冥助を請
ひ願ふ行の半ばを計らずして此の輭酥の妙術
を傳受する支と歓喜に堪へず綿々として
精修すること朝月ふるに衆病大半消
除して爾来身心軽安なる事を覚ゆるの癡
々兀々月の大小を記せず年の冥餘と知らず世
念次第に軽微にして人欲の舊習もいまだ

忘れざるのみ一馬年今歳行十歳なる支も
猶知らず中に端由有て若丹乃山中に潜遁せ
る者大凡三十歳世人都て知る事なし中ごろ
を顧るに恰も黄粱の熱の一夢の如し今此山中
無人の處に向て此枯稿の一具骨を放て大布の
單衣漫々に二三片を掛る厳冬の寒威綿を
折るの夜々伊恵るも枯腸を凍損するにい
たらず山粒をもて断へて穀氣を受ざる事

動もすれば彩月に及ぶといへども彼に凍餒
乃覺へも無き夏は皆此親のからなればや我
今既に公に告るに一生用ひ盡さざる底の秘訣
をゝゝて此外更に伺ふとゝ云て目を收
んて默せて弔も永く涙に含んで禮辭を
徐ゝて洞口を下れば木末漸くに殘陽を
掛ゝ時に復あれ丁ゝて山谷に答つゝあ
り且驚き且怪んで畏ゝ回顧すれば遥に

迷が巖窟に離と自ゝ送り来るを見る即ち曰
ゝ人逐不到の山路西東分ち難ゝ忍ゝは歸容に惱
せんを更志ゝ飯程を導んと云て大駒長に着け
瘦鳶杖に引き峻巖踏ゝ嶮崖に陟る事飄ゝと
て坦途に行ゝ談笑して先驅を山路遥に
里許を下て彼溪水に到て即ち曰ゝ些の流水
に隨へ下らば必ず白川乃邑に到ゝむと云て慘
然ゝて別る耳ゝ柴立て遙に面歩を目送

ちるに其老歩の勇壮ふゝ支飄能くして世を
遺さて羽化して登仙する人の如く且羨く且
敬して自限じ世を終るまで此る人に随逐する
事能わざる事を深くして帰り来て時く
に彼の内視を潜修するに俄かに三年に充た
ざるに従前の衆病薬餌鍼灸を假
らず任運に除遣して牡り病ひ治るのみにあ
らず従前の御を校し支ひで歯牙ひ下して事

得ざるまた底の雖解難人底の一箇の根
に遇り底に徹して遇ひるもして大歓喜を得る者
大凡六七回の餘の小悟昭脱踊舞を忘る者数ひ
らず妙喜の謂ゆる大悟十八度小悟数ひ知らず和
て知る寔に我を欺くの事と古三三昧の禍ひ着く
と云ども足心常に氷雪の底に浸すが如くなる者
今既に三冬爲の日と云ども織ず焼ず
馬歯既てに古稀を越へると云ども猶て働き

少點の小病も治さるゝ度ハ彼の神術の餘勢ならんかと思ふ事ふかし鵠林は死の残端多少無義荒唐の妄談伝記取りて居て他の上流を誑惑せしは是宿とに霊骨有て一概に既に成られて底に後流の為んに設くるにあらば癡絶子が如く勞病子に類ひなる底看讀して細に観察せば必ず少き補ひふるんか只思る別人のまに柏して大笑せん事と何の故ぞ馬枯其と咬んで午枕に喧びたる

白隱禪師施行歌

今生富貴なる人そ。前世ふ蔭ゆく種ぞあるぞ。今生わどこ〜せぬ人そ。未来ハきもめて貧るぞ。刑口で富貴ぞるなら。縄なる人そみな死の。刑口で貧乏なるを見よ。あの世を前世の種ぞ。未来ハこの世のたよりぞ。ゆくさ大ふあるぞ。蔭あるよ大ふあるゆゑぞ。この世ハどうの物もとバよ種なくんで治さるんだ。ぞ。隙なくうるざるとバ。

穀物とりたゞけなり。田畑に麦稗まのぶして。麦を入るたゞ〳〵なり。もゝきひえそばはさゝげ。五穀や一切ハみのるぞや。志すれば其とゝの施〳〵の福も。果報を倍〳〵あるものぞ。況やはぢ〳〵おのれ〳〵も多〳〵と計志ぞ。それゆゑに釋迦も観音も施〳〵せよとゝめたり。されば乞食非人まで。救ふたゝりを為そゞ。おの〳〵富貴で持たゝり。有ハ有ほたらぬとの。おの〳〵の寶をゆぶるとも。持ゝ子ゞ持ゝ子ゞ持ぬもの。少も田畑ゆゞらるゝど。持ゝ子ハあれ持りのぞ。我子の繁昌祈るる。人様ゞさゞ施行せよ。人をたを〳〵てもつたゝ。我子にゆゞりて怨となる。ひゝの眼のかゝるものゆゞる我子ゝ沈こまる。弊や秤や算盤や。筆の非道をし給ふな。常〳〵高ひとゝろ云〳〵。あすり非道な利をとる。死んで三途ふ入る手ぞ。其身ハ三途ゝ落入て。屋敷

ハ草木の生茂る。非道ハ子孫の害となる。親の悪事の身に酬ふ。世間の教へ有物ぞ。一門繁昌する事。親の悪事をせざるゆゑぞ。若又親をそむくもなば。はなはだ重恩思ひしるべし。子孫差しむ親ごころ。荒ひ風をも厭ひしぞ。それわど親を思ふれて。親孝思ふぬかろうさよ。たやすく不孝なる人々やゑ為る男りなり。娘むすめをもつと思ひけるに。惜むべうハ子ものぞ。親の後生の為なれば。

其金出して施行せよ。飢死ぬ人ハ助けなば是ハ勝れる善事なり。たとひ万貧長者でも死んで身に物ハ無し。妻も子供もぜに金も。捨て冥途の旅立ち。冥途の旅立ちの時ハ。車もきらくで目も見へず。行ぬ方ざに門ばいで。闇ば屋みぢに入るなり。其時後悔のぎりなし。兎角命のあるかぎり。菩提の種ばかりを。たまへ。命ハ脆きものなれば。家の命ばかり名ばけたり。今宵

痛が仕初めて九死一生なれもあり。強い自慢をする人。善ふれ死をもとるもいつぱい他人に葬礼明日我身の葬礼だ。如何ぞ安堂金銀をかくしてる富貴人幸ひ有人ハ。貧者を施せるべし。貧者ハ施せぬ人ハ富貴人でもかうしたもの。物でも口ハ施せるぞや。飢人貧者に助べし。慈悲根ハ慳貪。家繁榮のハ祈傷ぞ。慈悲善根をとる人ハ。神も佛もよまもられて。天魔外道より

附ぞ。無ましバ祈傷よりまるまひつ。よ〳〵不倹せふ。慈施なくば。ほやは。餘りどりよ〳〵目にあまる。飢死ぬ貧者を人思振よ。善をとらろハ鬼神の慈悲善根のなき人ハ子孫ちんぼう長うしじ。寶をかりハるきものぞ。施行で借物しあんよ。それらそ真の信心。上ぞる人ぞじめと。頭立たるもしじ。口ともと無よ。

貧者ぞ施行ハ身代ぞ。貧者の命救ふ。

廣大無邊の善事也。悪生業者を殺し、魚肉を食し、累報有まいの人の食物をつくる。成好んで拾ふて、くう物ハ。前世か前生か種たる罪也。是非の報ひ。

乞こと事ぞ。ゆゑ有様見るとの、仏心起こぬう。ゆゑふかくまつ人。信心あれば人でなし。此節信心あらば。金牛馬あらく

なるべ

施行歌終

安心法興利夏々記之序

此書ハ零餘雞と名付事自己来源風月八日乃

煩悩ハ頼て西方浄土ハ立帰るべき

ちなるべ　雖然祥光寺の傷ハ知る八浄土

門の願徳ハ頼て別ちなく蛮禅ハ通す一とせ縁

別あの白徳禅ハ沼ふ得て別合好段の上一首

の歌ハ成ぬ

て夏ハの歌成月ハ　禅師ハ

学して和尚の法〜六字の関源を徹する底
徹〜一角の僧如来を仰〜又は底歓作
しと称りやさもりれ今面作脱は逆化わ
て年ほり来〜底奥の海と郷きも家
かいたりよて樵木をちりとめて称名梅名の
風り底覺さんるり底ものもの〜

安永三年春三月下旬

安心おこりた〜紀　白隱禪師作

帰命頂禮御釋迦如来○やも〜皆きんゆても訓な
ひ○お〜が親仁底仁の國の法人も○悉多太子まらぬ
佛〜○若ひ時〜商ひ好みて○親の讓りた家も
位すんと捨すて○十九の年の〜山へとりて
○迦蘭羅阿羅々の二人の仙人師匠と仕〜て業
水汲薪と携てる○奉公勤めて元手底こ〜ら○
三十年月ふ初て底〜○華表と名ぢけ〜活

様な代呂もの○賣てゝた主ゝで文殊ゝ菩薩の
二人買たゞ○あまり高ゝて千余の内客人○盲
ゝ鮮ゝ見合せ思ゝゝ是ていろゝ分別仕替て
○阿含ゝ為づけ一安もの賣ゝけ○口上ひゝれば
店さ記せゝゝゝ内客ゞ来ゝゝゝ得意ゞ付ゝゝ○
そこで迚ゝ代呂物仕て○商ひ店ゞ方尋般
若ゝ○法華涅槃と客の様子見て○まゝ行て
ふ商ひ上ゝゝ○須達ゝ名付いゝど志ゝゝ金持○滅

法ゝれゝゝ紙園精舎ゝ名を毎日為て○は釈迦
にてゝひ店出ゝゝゝたゝ○まゝ迚ゝ名ゞ諸方へ
ひろまり○ゝゝゝゝ程商ひ繁昌○天上天下に
一人の親にゝ譽てゝ訓ひ○ゝ妙法秘蜜の精
薬○法華の一法まんゝ流行て○は若ひ如来竜女
ゝゝゞ志を買請ゝゝゝ呑迚○成仏ゝたゝゝハ
我等の婦ゝハゝゝゝ達ひゞ○又ゝゝ阿闍世
ゝゝた会敵の手柄○提婆達多ゝ心を合して○は釈

此の店とバ佐兵衛てのけよ〳〵○己が母者人章提希夫人を窄屋へおし〳〵こゝ○は釈迦の代呂物買さぬ子簡○おそこでまゝ八ふ楽簡字と此世成敗〳〵て○智恵もえ〳〵しごゝ〳〵ぬれ〳〵も○五陵三法四ゝれる大病○なをも薬がわるらゝ下〳〵毒は釈〳〵○逆りよりゆゝて は多ゝきれバ○は 釈迦八兼知て五三の相だよ○此相ゝは宮ゝ大りたゝ〳〵〳〵○四十余年の長の月日を○御蔵へ納めて仕迹でちひ〳〵ゝ○さゝ

八是ゝ〳〵賣うけまゝ出ふよゝ○阿難目連三人の代代○左右ゝ召連王宮ゝ〳〵て乳出現るゝれて○章提希夫人ゝ弥陀の本願他力の称名○五劫兆載思惟の薬ゝ成○ひとゝふ合〳〵た六字の九薬○一句ゝ念産前産後ふゝ〳〵合ゝ〳〵ぬ○智恵もえゝもさゝ〳〵〳〵るゝ○ゝふまうせて唱ゝ〳〵りだ○心想羅漢ゝ成ゝ天眼○智恵ゝ虚弱で元ゝのたゝるゝ○は脈もゝんぬい〳〵五陵の手病○よ〳〵て弱

治の極重悪病これらも性分ハ○是より外ハ用ゆ
る藥ハさんざうないぞ○法華経のそれくまん
ハえうり五百の侍女まで○子を始より一生ハ
し罪業○煩悩疑惑の積氣の持病○三世の諸
醫師も匙投げ○其場で現益阿耨多羅
○汗ゲ流して即日平癒○なんと皆さん六字の九
字風てくなさん○元のいつぬゲ肝心要めた○
ほんまうの造作で祖父婆ゝだまりの右代呂物

くちつくり疑ひ○頑ゝそ利口物ハ百ぺんつゝ知識小間
○直指人心見性成仏○味噌漬が外ち黄ゝ知ゝ○加
藤ゲ先ゝ知ゝ賣○是ゲ本法嗣あるの実の眼を
開ひて看れば○は秘迦牟尼ハ何物○本来面目ハ
○こりゃ中ゝ高い○ぢ物ぢ程
を始てやりけ○たゲ○藤ゲ婦りぶりつき
まんやゝ眠りか来タ○宵ゝやれ大きん
ほ同ぢ○爰ゲ抱ゝきぢて○ゝれば

○三年むかしに陸奥国にたる黒豆三合糠を
妙○思ひ出して忘念山〳〵○これも我等が性み
おこれぬ○高買かよふと言秘密を○どの様
な物ぐさ〻なる見られぬ○阿字本不生で自身
の胸ふも阿字の備り○羅字ゝえうり呉郡と
なれて○五智も五大も金胎両部も○此物一つで父
母の腹ゆゝ生れ〻所が○直ふ佛の位でごんゝ
〻と〻紀○ヲンアボキヤゆそ〻やりかけれども

元もゝ拔ぶる自力の商買○阿字ゆものゆてきん
〻ゝ志を移ふ○おそこで圓頓妙法蓮華即身成
佛○扨も子〻上の妙剣ゆるもとゝ○我等ゝ根機及
びもるひも○題目ゝゝゝ里の切経看板○僧でゝゝ
もとで元もゆゝゆゝ代呂和買もす○四十余年の
未顯ゝ実○何の半たゝ求えてうゝれぬ○
六字の名号ハ法華経の略ふ〻○薬王ふハ
妙典八油呑迦時ふゝ○西方極楽阿弥陀の座

へ生れて行ぞ〳〵○説て有もどと○仏も勤定
だ廻り〳〵て遠道せうより○路根のいとゝ多く
ま〳〵阿弥陀佛を多くの近道○好んと皆さんこゝハ
でゝ多ひる〳〵○嵐辰で二合でゝして戒行持つハ
○姑来影迄利口多く異国○志〳〵我多ハ蚕も
風もとゝびみやおらね〳〵つをハ出て盗ハ世界
ども○心ふ欲〳〵て月うけよ持〳〵○涙多ハ
子程ゞ多〳〵ある○虚ふ〳〵ハたらねども〳〵○

酒も呑ゝ婦ハ増礼振舞○万事の付合世間ゞ浮ども
○何と是でハ五戒ゞ拵てぬ外の高貴仕様ゝと思ハ
○根様と元ゞゞ好〳〵て出来ねハ○とゝでも親父
の教ふ通りて○元ゞのいとねハ六字の高貴○我
皆ゞ程様ふて〳〵さり合ます○御元ゞゞ浅山
あるゝ〳〵○自力の高ひるさて法堂〳〵○細ひ
元ゞゞや一向い多ひ○捧でも打〳〵逐地も
吉地も弟の末烟ではゝ迷ひるさろぞ○者〳〵し

をゞてもうんかをい諸宗の祖師達○幼ものも之をも
ほめあとゞ○六字の業とは捨ハものをきこぬ○南
て家者ハ智と恵も元よりも根株もなひ○自力
の建他力の御船ハ○家ハ船ハ○乃まゞ手作佛ハ成とハ○石や瓦ゞ恵ハ成ハ者ゞ
て黄金と成のゞ○夫ゞ虚ハ御寺の坊ハ者
ねて賢ゞ○何と学ぎん嫌ゞ○ゞ儒道
や神道や心学ぎんどのハ高貴ゞ○あれもん敵ゞ

いろ〳〵さま〳〵悪口いゞも我等ゞ親父の仕ハせの商ひ
○格段遠ゞてゞ○ひもんゞ○根元本家ハ天竺
横町○まゞ〳〵唐土日本〳〵唐出○八宗九宗〳〵
〳〵代呂物ゞやゞ〳〵ゞ〳〵ゞ○おゞ〳〵ゞ〳〵ゞハ居〳〵
ぬ○恩と多ゞ上〳〵ゞ○御用ひるゞ〳〵六字
丸茶○朝夕忘ゞ〳〵ゞ用ひてゞ賢ゞ○四海静ハ
現世ハ繁ゞ栄ゞ子孫長久○今世の祈願も来世の利
益も○是小過ゞ〳〵ゞ○虚ハつゞねゞ是皆

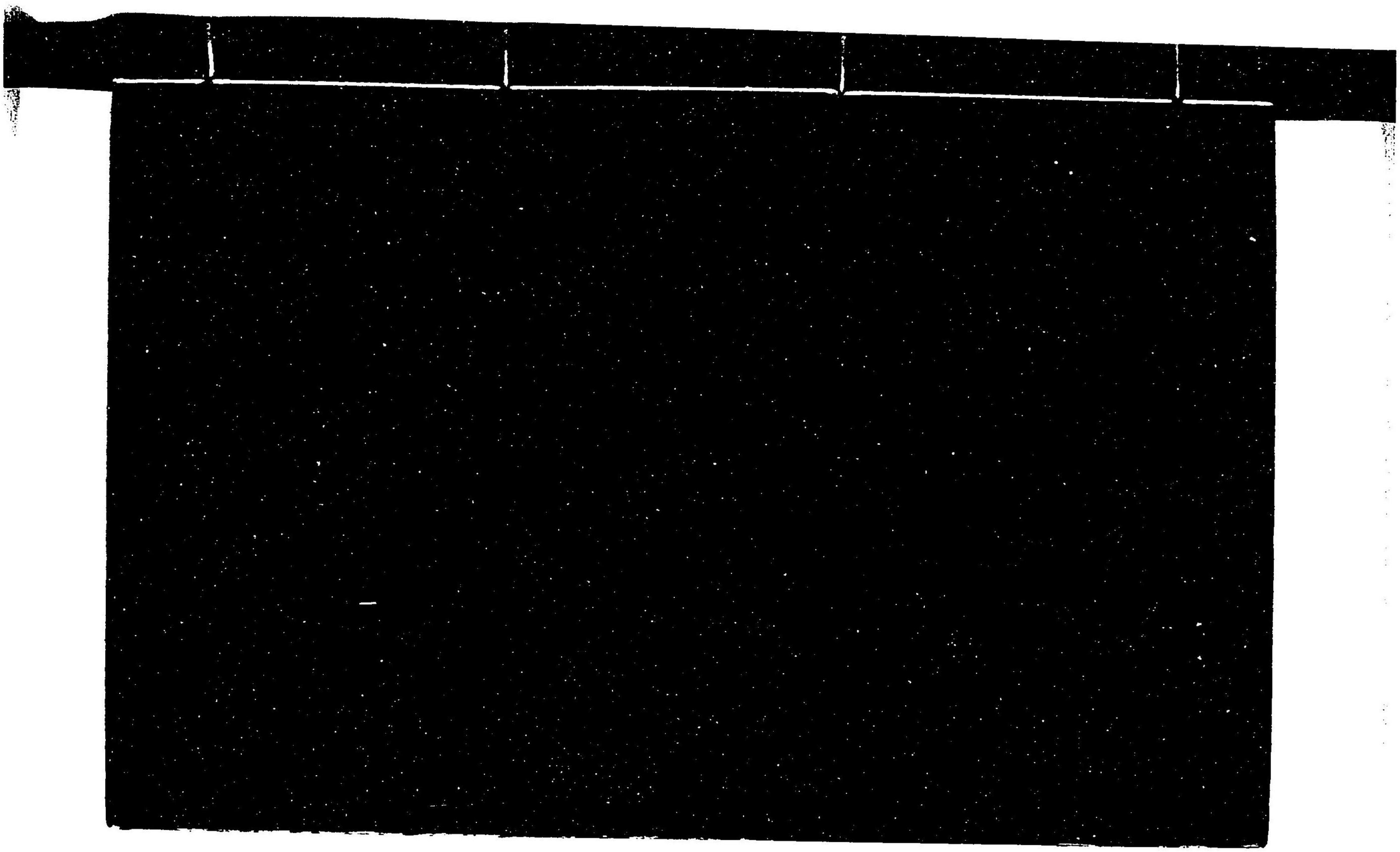
183
2
288

御釈迦の味噌でハ法ぬ。本法の事なよホヽヲヒホウ〳〵

明和元申年十月　沙羅樹下

蘭堤翁述

白隠禅師假名葉乾之巻終



183
2
288

東京圖書館
和書門
擬古類
三四函
七架
八號
二冊

019390-001-6

183-288

仮名葉

慧鶴／著

M17.7
ABG-0090